法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

マルクスのリカード批判

HIRABAYASHI, Chimaki / 平林, 千牧

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
51
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
87
(終了ページ / End Page)
115
(発行年 / Year)
1983-10-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008444

マルクスのリカード批判

平林千牧

目次

一　はじめに
二　リカード「修正論」批判
三　リカード「自然価格論」批判
四　小括

一　はじめに

A・スミス評価に関連して、価値・剰余価値論を、一方ではある歴史的推移に関連させつつその意義を与えたマルクスではあったが、それがどの程度まで、対象（資本主義）の統一的解明となりえたかについて、かなり疑問を残こすことになった。彼の対象把握の方法が彼の学説史批判において十分な効果をもたらしたか、ということに関してみれば、それゆえその点でも否定的な側面を無視することもできないのである。もちろん、そこで直ちにそうした結果をもたらしつつあった彼の方法はまったく水泡に帰しているというように決めつけることにならないだろう。とりわけ、『グルントリッセ』での考察と比較すれば、「六一～六三年草稿」では、他方でその学説史的検討が

非常に重要な役割を果たしていることを否定しえないし、またこうした特徴は、同時に、彼の『資本論』の体系化作業と相俟って進められているのであって、外見的にしろ、彼の方法によって十分処理しえない論点を、彼自身いかように再構成するのかがいわば問われていたとみなしうるであろう。

事実、「草稿」では、すでにこれまでに検討した範囲でもそうであったが、十分とは言えないまでも、いくつかの点でそうみなしうることになっていた。スミス、リカードの価値・剰余価値論の批判的検討という場合をとってみても、必ずしも彼の議論の性格を方法的に一様のものと固定化しうることにはなっていなかった。その点は、例えばスミスの価値・剰余価値把握の「歴史的」視点に評価を与えながらも、他方でリカード体系の「難点」を指摘し、そこで価値と生産価格の問題を取り上げるということになっているのであり――さらにすでに「草稿」では「貨幣の資本への転化」が事実上論理化されつつあったことを考慮するならば――、やはりそこに斉一的とは言い難いものを見ないわけにはいかないであろう。

もちろん、右のように理解したとしても、マルクスが原理的な体系を形成しつつあったさいに、その方法的基礎は対象を二つの「過程」「側面」からなるものとして把握してゆくということに置かれていたのであり、こうした方法的視角に大きな変化が生じていたとは言いえないであろう。したがって、いわばこのような彼の方法とその方法を越えるものとの関係をなにかある枠組から見透すあるいは判定するというような問題はかなり困難であり、またそのための明確な手段も与えられていないようにも思われる。もっとも、大枠としては、その場合にしばしば利用されてきたものとして周知の「経済学批判体系の諸プラン」が存在しているのであるが、[1] それらにしても、すでに明らかなように、必ずしもそれ自身、大きくはマルクスの体系化作業の指標とされるにしても、絶対化されうるものではなく、かつ細部の変化を、とりわけ論理的内容を十分理解しうるようなものとはなっていないのである。

そこで、より内在的にマルクスの理論形成を探る場合、きわめて重要な手掛りとなるのが彼の諸学説の批判であることは、こと改めて指摘するまでもないであろう。とくに、六一～六三年における「草稿」において、マルクスはその学説批判を通じて詳細な理論的解明を与えているのであり、ここに彼の対象把握の内在的性格を明らかにする重要な要素が含まれていること、あるいはその要素の検討からマルクスのこの時期の原理的規定自身に含まれる先行諸学説の批判的＝前進的理論規定が十分その目的を達しえているのかを究明することも当然重視されなければならないわけである。もちろん、こうした研究は事実上すでに進められてきているのであって、あえて言及することではないであろう。しかし、こと彼の学説批判の妥当性にまで立ち入るということになると、その点は、今もって必ずしも十分ではないように思われる。すでに前稿で若干の考察を行なったように、(2) 例えばスミス―リカードを軸とするマルクスの批判的考察には、やはり彼の方法的視角に踏み込んで見た場合でも必ずしもそれに十分整合しえないような議論が進められていることを見ないわけにゆかないのである。しかも、そうした彼の理論的変調は、見方を変えるならば、あるいは彼に生じた新たな理論的進展を含むものとも言いえようし、またはそうではないにしても――つまり結果的には彼自身が明示的に展開しうることにはならなかったというものであるにしても――、新たに考慮されなければならないはずのものと言いえよう。

小論は右のような点を念頭において、先きに若干の考察を加えたマルクスのリカード批判について、さらに幾分かの検討を進めようとするものである。そのさい、中心的には、「草稿」において「剰余価値に関する諸学説」とされたその学説の重要部分にリカードが置かれているという自明なことと相俟って、内容的にも彼のこの時期までには決してみることができないほどに、リカード理論に対する内在的な考察との関係で彼の理論的深化がはかられていることもいっそう考慮されるべきと考えられるからである。そしてその場合、リカードとの関係で重視される

ことになるのは、彼の剰余価値論批判と密接に関連するマルクスによる利潤論への展望となるのであるが、この点は『グルントリッセ』の萌芽的なそれとの対比[3]において外見的にも明白であり、かつ以前にすでに言及したようにマルクス自身の「リカード学派への覚え書」からしても十分伺えることであろう。他方、こうしたマルクスの利潤論の解明は、リカード批判との関連では、彼のこの時期の「価値法則」の理解と不可分の関係で提起されているのであって、この点からすれば、当然のことながら両者の内容上の結びつきの性格が彼自身の理論において十分獲得されえているかが依然として考慮されなければならないであろう。というのは、前稿との関連で再度言及するならば、価値論に対する彼の学説史的裏付には多分にA・スミスへの傾斜がみられたのであって、この点にかかわるその理論的意味あいをこの場合も無視するわけにはいかないであろうからである。

他方、右のような問題の解明は、リカードの限界の克服という地点からすれば、資本主義に特有な分配「形態」としての解明という問題次元であったわけであり、その意味では利潤の剰余価値への還元という事柄以上のものでなければならなかったはずである。すなわち、それは、古典派が利潤や地代と並んで賃銀を分配範疇と理解したことへの批判として、剰余価値論をもってその克服の道筋が可能とされ、確かにより正しい規定が示されうることになってきたのであるが、ここにはまだいっそう徹底されるべき問題が残されてもいたわけである。それは、例えばマルクスがスミスに対し「剰余価値」の把握においてリカードよりすぐれた側面があるとするときに、このことの評価そのものは別にして、彼の視点をリカード―スミスというようにたどると、そこには利潤を剰余価値に還元したとしても、なお利潤を的確に規定するために欠如している事柄があることも見落すわけにいかないであろう、となるものである。この点は、すでにスミスについて考察したさいに、別のかたちでも指摘しておいた論点と密接に関連することになるのであって[4]、スミスのいわゆる労働生産過程の交換過程化的把握から生じたことと結びつく

ものであった。スミスにおけるこうした把握は、たとえリカードの労働価値論に明瞭なかたちではないにしろ継承されているのであって、そうであれば、すでにリカードでは逆に明確に利潤形態を抽象しえなかったことが、当然生じうることでもあったとみなしえよう。

右のようにみるならば、マルクスのリカード批判就中彼のいわゆる「リカード体系の難点」のうちの第二の「利潤」にかかわる論点は再度彼自身の原理的体系形成に対しきわめて重要な内容を含むことになっていると考えられる。もちろん、「草稿」にみられる種々の考察が全体として彼の体系形成と不可分な関係にあるのであって、ここで取り上げる諸点によってすべての解明が得られるわけではない。しかし、おそらく根本的なところで体系形成の性格を左右することになった彼の方法的視角に密着する性格という点では、やはり重要な問題を含む領域もおのずと絞られることになっていたはずでもある。以下は、以上のような観点のもとに、前稿に続いて考察を進めようとするものである。

(1) 小論においては、このいわゆる「経済学批判」体系の諸プランについては、いちいち言及するようにはしていない。マルクスの『資本論』成立過程において、内容的にも特にプランの変化と彼の体系化作業とを考察しえたものとして、時永淑『経済学史』(改訂増補版、一九七一年、法政大学出版局)三九二ページ以下を参照されたい。

(2) 「マルクスのリカード批判(序説)」、『経済志林』、第五〇巻第三・四号合併号、所収。なお、本小論は前論文を「序説」とした関係上一応それとは独立の論文の体裁をとったが、内容上は続編をなすものとなっている。

(3) 『グルントリッセ』(Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwürf), 1857～1858)については、拙稿「『経済学批判体系』の一考察」㈠㈡(『経済志林』、第四〇巻第三号および第四一巻第二号、所収)において、すでに若干の検討を試みている。参照されたい。

(4) この点に関しても、拙稿「『経済学批判体系』の一考察」㈢㈣(『経済志林』、第四二巻第一号および第四三巻第四号、所収)を参照されたい。

二　リカード「修正論」批判

「草稿」[1]において、マルクスがリカードの剰余価値論を批判しえたのは、彼の対象把握の方法のかなり直接的な効果であったように思われる。その限りでみれば批判における難点はともあれ、彼の方法的視角の積極的側面を認めないわけにはいかないと言えよう。しかし、リカードの提起した問題からすれば、この点は、同時に剰余価値を再度利潤形態として展開することによってはじめて一貫しうることになるのであって、当然のことながら、マルクスはその問題に立ち向うことになるわけである。しかし、この時期のマルクスが、果たしてその利潤形態を十分な理論的展開のうちに規定しうるようになっていたかということになると、必ずしもそうはならない。周知のごとく、彼はその考察の過程でもいまだ「生産価格」というタームでさえ十分に確立しえていないのである。用語的には、「費用価格」によって事実上生産価格を示すことになっている。もちろん、このような用語上の不確定がそのまま内容上の意義を表わすものとは言えないし、実質的に彼ののちの「生産価格」を展望しうるものとして認められうる性格にあると考えられる側面を、無視することはできないであろう。とはいえ、彼が「草稿」において、とりわけリカード批判との関係において、かなり強固に維持することになっているのは、例えば次のような見地によって示されているものであった。「労働日が与えられているとすれば……、その場合には、労賃は平均的には同じだから、剰余価値すなわち剰余労働の一般率も与えられている。リカードはこのことを念頭に置いている。そして彼はこの一般的剰余価値率を一般的利潤率と混同するのである。……一般的剰余価値率が同じである場合でも、もし諸商品が価値通りに売られるとすれば、利潤率は違った産業部門ではまったく違っていなければならない。一般的利潤率は、生産された総剰余価値が社会（資本家階級）の総資本に対して計算されることによって、成立する。した

がって、特殊な各産業部門の各資本は、不変資本と可変資本との構成に関しても流動資本と固定資本との構成に関してもともに同じ有機的構成をもっている一つの総資本の可除部分として表わされるのである。各資本はこのような可除部分として、資本の総額によって生み出された剰余価値のなかから、その大きさに比例して、その配当を引き出すのである。(2)」

このマルクスの利潤＝一般的利潤率に関する議論は、彼がリカード批判として剰余価値と利潤とを区別しえたかぎりで、あるいは彼が自己の批判的・方法的視角として資本・賃労働関係の把握を導出したかぎりで、成立しうるものとなっている。そしてまた、形式的には、その意味で彼の古典派を超える利潤論の視点が与えられているように見える。しかし、これは、厳密に言えばいまだ一種のトートロギーの域を出ていないように思われるものでもある。というのは、彼が「一般的利潤率」を、総剰余価値が「社会」の「総資本」に対して計算することによって成立するもの、としている場合、すでに結果として生ずる利潤率の均等化をもって、剰余価値そのものとの区別を指摘しているのであり、これは、いわば剰余価値を把握しうることになれば、一種必然的に生ずる区別になっているにすぎないことなのである。言い換えれば、総剰余価値が社会の「総資本」に配分される率として一般的利潤率を明らかにすることは、確かに一面ではリカードの利潤と剰余価値の同一視を批判しうることになっているのであるが、他面ではその同一視において生じていた別の問題を正確に取り出していないことになっているのである。総資本というマルクスの抽象は、リカードのその同一視とそこから生じた「修正論」とが背負っていた困難に対して、剰余価値が利潤として配分されるという解答を与えただけであって、個々の商品が価値（交換価値）とは異なる交換基準を形成しなければならないというリカードの別の問題に対して直接の解決を与えているわけではないのである。

こうした点をリカードの問題提起というかたちで扱えば、おそらくこのように言うことができるであろう。すなわち、自明なことであるが、彼がマルクスの指摘する同一視に結果したのは、個々の商品の交換価値とその交換価値の実体たる労働とを直接結びつけていたからであった。彼にとっては、個々の商品は他の商品との相対的関係においてすでに社会的であり、またその社会的たることにおいて労働も価値としての実体たりうる存在であった。こうした彼の理解の根源には、すでに考察しておいたように、彼によって継承されたスミスの労働価値論（労働＝本源的購買貨幣としての）があった。この労働価値論がリカードにとって必然的であったのは、すでに諸商品の個々の存在が社会的になりうるような性格を有していたからであった。しかも、スミスとは異なり、彼はその社会を三階級関係として設定したのであるから、そうした個々の商品の関係は同時に資本の産物としての諸商品の関係としての社会的在り方でなければならなかった。したがって、個々の商品はすでにその姿で個々の資本を担うことにならざるをえないわけであり、具体的には彼の修正論によって与えられてくる基準をもって現わされることになったのである。リカードの『原理』第一章に即してみれば、この点は第三節における固定・流動資本の割合の等しさと固定資本の耐久性の等しさとからなる社会の「総資本」の等しい利潤率に対して、その「総資本」が個々の資本という、割合を異にしかつ耐久性をも相違するさいに生ずる第四節以降の修正論であった。それゆえ、ここでは、利潤率の等しさのために生ずる価値・価格関係が個々の資本の生産物たる商品のとるべき基準の問題として生じているわけであって、剰余価値と区別される一般的利潤率そのものの事柄をもっぱらとしているのではないであろう。

もちろん、右のような問題の取り扱い方は、多分に誤解を生みかねない。リカードが恰も一般的利潤率を規定しえているかのように扱っているからである。しかし、そういうことではないのであって、利潤論としても、マルクスのリカードの受け止め方は、先きのようなことでは必ずしも解決すべき問題として十分なことになっていないと

いうことなのである。奇妙な抽象とはいえ、「総資本」というような抽象次元の性格は、リカードにとって「鹿一頭は鮭二尾に値する」ような事態として、割合が同じで耐久性の等しい資本によって一般化される「社会発展の初期」というように把握されている。このことはまた、反面からすれば、具体的には資本は割合を異にし、耐久性を違える個々の資本として存在する以外にないのであり、したがって、そうした個々の資本の産物としての商品の価値・価格関係の社会的基準たる修正論こそリカードの問題であったと言いえるであろう。それゆえ、ことばを変えれば、リカードにとっては、「総資本」の場合には「一般的利潤率」と諸商品の価値・価格関係との間で問題が生ずることにならないのであって、個々の資本の場合にはそうでなくなるということになっているのである。(3)

ところで、右のようなことについてマルクスがまったく気づいていないのか、ということになると必ずしもそうは言えない。反語的であるにしろ、かなり重要さに気づいているようにこの事柄への指摘を行なっている。すなわち、彼は次のように述べているのである。「一般的利潤率が出現し、現実化し、成立するためには、価値がそれとは違う費用価格に転化することが必要である、ということは明らかである。リカードは逆に価値と生産価格との同一性を想定している。というのは、彼は利潤率と剰余価値率とを混同しているからである。したがって、彼は、一般的利潤率が成立することによって商品の価格に生ずる一般的変化をまず考えなければ、一般的利潤率を論ずることはできないということには、ほんの少しも気がついていないのである。彼はこの利潤率を先行者として仮定している。したがって、これは彼の場合には価値の規定のなかにさえもはいるのである。(第一章「価値について」を見よ。)彼は、一般的利潤率を前提しておいて、この一般率を維持し、この一般的利潤率を持続させるために必要な、価格の例外的修正だけを考察している。……したがって、自分が一般的利潤率の基礎のうえではもはや直接に商品の価値を取り扱っているのではない、ということには少しも気づいていないのである。(4)」

このように、まずマルクスの指摘はそれ自身きわめて正確なリカード批判のようにみえる。しかし、この正確な批判が彼のリカード価値論や剰余価値論の考察との関係で理解するということになると、やはりただちに首肯しうることにならないのである。マルクスの言及している「一般的利潤率」の成立と商品の「価格に生ずる一般的変化」に対するリカードの無理解は、結論的にリカードの原理の欠陥を指摘するものとして認めうるにしても、それはリカードの理論に即してみると、次に本質的なこととしては、彼がこの利潤論を「価値の規定のなかにさえもはいる」ように解していることこそ重要視されなければならないのである。まさに、マルクスはそのように述べているのであるが、残念ながらそこに横たわっているはずのことに充分な注意を向けていないように思われる。先きにも言及したように、リカードが『原理』第一章第三節において資本構成の同一や回転期間の等しさを取り上げたのは、第一節以降に個々の商品の相対価値を論じ、この個々の商品の価値・価格関係の規定をもとにして、その価値の賃銀・利潤の内的分割を一般的に、したがって個々の商品の価値の分割でありながら同時に商品総体にとっても一様に、決定しようとしたからであった。このこと自体のリカード理論における意義についてはすでに別に論じており、[5] なお、若干言及すれば、彼がそうせざるをえなかったのは、彼にとってはいわばそれほど反省的に明確にされたことではなかったものとしてのA・スミスからの継承関係によって規制されてであった。それゆえ、厳しくみれば、リカードの価値論全体についてはそもそもスミスからの根本的な洗い直しが問われていたのであるから、その点が十分ではないかぎりほとんど否定的評価に終始しうることにさえもなりえよう。マルクスの先きのような批判はほぼこうした性格のようになっている。しかし、他面でリカードはそのスミスの労働価値論に立脚しながら（もちろん、すでに彼の理解によって受け取ったかぎりでの）、スミスを越える価値分配の理論を考察しようとしたわけであるから、その理論形成の意義を彼に即して内在的に見出してゆくべきであろう。

そうであるとすると、再度マルクスのようにこの問題について「リカードは少しも気づいていない」とするわけにはいかないように思われる。その点は、一つにはすでに前述したような『原理』第一章第三節のごとき理論の設定をなした意味に関係することであり、リカードがそうした仕方で「一般的利潤率」を導き出していることが、逆に彼にとって「修正」論を不可避の問題とするきわめて明白な論理的性格とさせたのである。そして、この点に関するスミス労働価値論との関係もすでに別稿でみたごとく、古典派としてのリカードにとって個々の価値形成的労働を絶対的に前提し、それによって剰余価値を社会的に確定するためには右のような方法による以外になかったのである。しかも、この場合、彼らはそうした方法の枠のなかにありながらも、いわば古典派としてであれ、かなり重要な視点は確保していたのであって、商品経済があくまで私的な個々的関係を通じかつそこに一般的社会的性格を現わすことを解明しようとしたのである。リカードが「修正」というような不首尾な理論的処理を与えなければならなかったのも、彼なりにそうした点を解明しようとしたからだと思われるのである。それゆえ、マルクスが例えば「全資本」への剰余価値の平等な配分としてその点にかかわる難点の批判的視点を提示したからといって、ただちにその根本的性格を克服しえるようにはなっていないのである。

さらに、リカードが「少しも気づいていない」とするわけにはいかない別のもう一つの理由がある。このことについては、マルクスのリカード批判そのものに直接の関連があるわけではないが、少なくともリカードが「気づいて」いたことの理由となるものである。周知のように、リカードは遺稿として「絶対価値と交換価値」を残したのであるが、そこにおいて彼は労働価値論と交換価値との関係をかなり立ちいって考察を加えており、しかも彼にとってその解明は、『原理』において生じた「修正」論と不可分の性格にあった。この遺稿自体については、もちろんマルクスが検討の機会を持ちうるものではなかった。だが、リカードの『原理』そのものを、とりわけ彼がそ

こにおいて示した理論体系の整備の進展過程をみれば、リカードが絶えず彼の労働価値論と価格次元との関係で直面せざるをえなかった問題にかかわっていたことも明らかなのである。しかも、この点についてもすでに検討しておいたように、[6] 彼はそうした経緯のうちで、彼が継承したと自認したスミス労働価値論に立ち戻ってゆかざるをえなかったのであって、そうした意味でも彼の価値・価格関係に関する議論に対し、「気づいていない」と決めつけるのはあまり妥当なことと言いえないであろう。

もっとも、右のようなマルクスの論調は、ある意味では彼に特有な一種の強調であるとも思われわる。なぜなら、例えば彼は次のような指摘を行なっているのである。「第一章『価値について』のこの第四節全体は、混乱があまりにはなはだしいので、リカードがそのはじめのところで、自分は資本の構成が違う結果として労賃の騰落が引き起こす価値の諸変動の影響を考察したいと思うと表明しているにもかかわらず、実際にはこのことをただときどき例証しているだけで、彼は実際はこれに反して第四節の主要部分を次のことを証明する例証で満たしているのである。すなわち、労賃の騰落にまったくかかわりなく――彼自身が前提している労賃不変の場合でも――、一般的利潤率を仮定すれば、商品の価値とは違った費用価格が生ぜざるをえないということ、しかもそれはさらに、固定資本と流動資本との〔割合の〕相違にさえもかかわりがないということ、である。このことを彼はその節の終わりのところで、またしても忘れてしまう。[7]」このような表現がまったくリカードの理論と一致するものであるかどうかはともかくとして、マルクスもリカードがある程度「気づいて」いることを察知しているとしうるのであろう。そして、マルクスが、一方では「まったく気づいていない」とし、他方では気づいている――といってももちろん解決可能なようにという意味ではなく――としていることの差異の意味することも、彼にとって逆に十分気づくべき問題を示唆することになっていたとも考えられるのである。

マルクスがリカードに関して、さらに考察を進めている箇所で述べていることをみてみると、このような言及を行なっていることが注目される。「第四節にはまだ一般的利潤率によって生じた費用価格と価値との区別についての正しい予感があったが、ここ〔第五節〕ではもはやそれを聞くことはできない。費用価格そのものの変動に関する第二次的問題しか取り扱われていない。したがって、この節は、実際には、流通過程から生ずる諸資本の形態上の相違が折にふれて持ち出されているほかには、理論的興味はほとんどない。」(8) あるいはまた、「このようにリカードは、商品の費用と価値との相違、費用価格と価値との相違を、たとえそれを展開し理解していないとはいえ、とにかく事実上確認した……。」(9) こうしたマルクスの議論から明らかなように、彼はきわめて端的にリカードにおける価値と生産価格（費用価格）との相違の確認の仕方を読み取っており、しかもそれが、すでに一般的利潤率を想定したうえでなされていることであることをみている。この点は、すでに言及したようにリカードの第三節の展開から必然的になっているのであり、マルクスの指摘は妥当だとしてよいであろう。しかし、そうしたリカードの理論の欠陥あるいはそのための――とはいえ、リカードの根本的な欠陥によるためとうい意味ではなく――混乱に気づいているとすると、マルクスの言うその混乱を生じさせている「二次的」な問題に対して単に否定的な扱い方をするだけでは十分といえないことにもなろう。

つまり、マルクスは、リカードがともかく彼の展開を通じて「労賃の上昇は利潤を低下させるのではなく諸商品の価格を上昇させる、というA・スミス以来ひきずってきた重要な誤りの一つを駁がえしている」との評価を与え、そのうえでなお、そもそも費用価格とはなにかについてこのように解明しているのである。すなわち、「……そもそもこの費用価格は、総資本によってつくられた剰余価値を、別々の産業部門すなわち別々の生産部門のいろいろな資本に、分配することに関係するだけだからである。」(10) と。リカードがスミス以来の見地を基本的に批判しえた

のは、おそらく、彼の理論の出発点がそもそもその意図によるものであったということで当然だとしても、その決め手となっているのは、当面の議論との関係からすれば、第三節によって労働価値論と価値分配の基本的規定を与えたことによるものであろう。マルクスも見ている通り、第四節や第五節ではそのような点で一貫させられているわけではない。そうすると、リカードは第三節においては、そもそもスミス批判とともに一般的利潤率を賃銀（平均賃銀）に対抗させたのであって、その意味では総資本に対して平等な利潤を想定し、賃銀と対立させたものということができる。そこで、リカードにとって、これが価格関係（次元）として生ずる「費用価格」基準の問題となれば、すでにより具体的にはその賃銀変動との関係として論ぜざるをえなくなるのであり、これは資本の生産物としての個々の商品の価格形態に対する処理を要求するものとならざるをえなかったであろう。

そうであったとすると、マルクスにとってこの問題は、やはり総資本によって生み出された剰余価値の各資本への平均配分という図式では具体的解答とはなっていないこととなる。端的に言えば、マルクス自身も指摘している通り、リカードにとっては、その関係は第三節における「比較的価値」や「自然価格」の議論において彼の仕方として処理ずみであった。そのうえで、彼が、実はその価値・価格は性質を変えていることを、確認し処理するために賃銀変動との関係に彼の見地を提出しなければならなかった。しかも、この議論は、よかれあしかれ、一般的利潤率を想定し、そこに各資本の、マルクスの言う意味での総資本としての可除部分であるかのような理論を与えながらも、その各資本が個々的に運動する性格に根ざすものであることを、彼なりに認める結果となったのである。この点、例えばリカードは、第五節において次のように述べているわけである。「しかしながら、賃銀の一般的騰貴にさいし、機械に頼ることができてその商品の生産費増加を免れえる製造業者は、もしも彼の財貨に対して引き続き同一価格を要求しうるならば、特殊な利益を受けるであろう。しかし、すでに見てきたように、彼はその商品の

価格を引き下げざるをえなくされるであろう。そうでなければ、資本が彼の事業に流入し、結局彼の利潤は一般的水準にまで低下するであろう。[11]」

したがって、リカードが注意を向けざるをえなかったのは、こうした価格の運動によって個々の資本の運動が行なわれるということであり、彼がマルクスのいわゆる費用価格の解明を行ないえたとするわけではないが、少なくともその価格次元の性格について理解を与えようとしていたことは事実であろう。そこで、このような性格を考慮するならば、「……それぞれの商品の費用価格は一方がその価値よりも高く他方がその価値よりも低いけれども、それらの商品の合計はそれらの価値通りに売られるのであり、利潤の均等化そのものは、それらの商品に含まれている剰余価値の総額によって規定されている」[12]ということでは依然として十分に理解したことにはならないであろう。あるいは、すでにリカードとは異なり剰余価値を明らかにしているマルクスがここでリカードに対して解決しようとしているのは、剰余価値が利潤という分配形態をとるということ以上に出るものではないのであり、これ自体は間違いないとしても、リカードにとってはその利潤の形態が資本の生産物たる商品の価格形態と不可分であるために大いに困難とならざるをえなかったのである。しかしそれにしても、リカードは前述のように、資本の運動を媒介する価格形態に着目し、そして具体的には個々の資本の競争つまりは各生産部面の資本の流出入によって形成される一般的生産価格水準を不明確であるにしろ考慮する結果となっている。それゆえ、この点の解明についてはすでにマルクス自身に彼の考察の枠組を越える検討を要求するものとなっていたことも無視できないであろう。

(1)　マルクスの「経済学批判、草稿、一八六一―六三年」(Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861―1863) については、以下では、MEGA, 2. Abteilung: „Das Kapital" und Vorarbeiten, Band 3. Teil 3 から引用し、それについて、MEGA, Bd. 3-3 というように略記、また邦訳版『マルクス　資本論草稿集』6における『経済学批判（一八六一―

一八六三年草稿)』Ⅲ、について『草稿』Ⅲ、というように略記、Marx-Engels Werke, Band 26-2 については、Werke, Bd. 26-2 というように略記し、その邦訳版『マルクス・エンゲルス全集』、第二六巻第二分冊については『全集』第二分冊というように略記している。なお、引用は MEGA 版で、訳文は原則として『草稿』によっている。また傍点はマルクスの強調。

(2) MEGA, Bd. 3-3, S. 1057—58,『草稿』Ⅲ、六一四ページ Werke, Bd. 26-2, S. 436『全集』第二分冊、五八四—八五ページ。

(3) リカードがスミスの投下労働価値論を継承しながらも、彼においてスミスのその説き方に対応するはずの「絶対価値」については明示的に取り扱われなかったことは周知のことである。しかし、リカード自身もかなり明白にそれを論証不要な当然事として処理したことは、むしろ彼の『原理』第一章第三節における理論的手法と関係があったためであるように思われる。スミスのいわゆる「労働＝本源的購買貨幣」なる考え方は、スミスのそれを論じた『諸国民の富』第一篇第五章の世界に三階級社会をつまり資本と労働との関係を重ね合わせるようにするならば、すでにそのスミスの考え方自体を積極化しえないことになるわけであるし、さらにそれをリカード自身の世界に彼の理解として再現させようとするならば、総投下労働量＝総価値量を平均利潤プラス平均賃銀としての総量として示しうる第三節のごとき処理とせざるをえなくしたような性格に帰着すると思われる。

(4) MEGA, Bd. 3-3, S. 1058,『草稿』Ⅲ、六一四—一五ページ。Werke, Bd. 26-2, S. 436—37,『全集』第二分冊、五八五—八六ページ。

(5) 前出拙稿「マルクスのリカード批判（序説）」において幾分の検討を行なっているので参照されたい。

(6) 拙稿「リカード労働価値論の一考察—彼の絶対価値との関連で—」(『経済志林』、第四六巻第二・三合併号、所収）における検討を参照されたい。

(7) MEGA, Bd. 3-3, S. 844,『草稿』Ⅲ、二七七ページ。Werke, Bd. 26-2, S. 192,『全集』第二分冊、二五一ページ。

(8) a. a. O., S. 845, 同前訳、二七八ページ。a. a. O., S. 193. 同前訳、二五二—五三ページ。なお、マルクスがここで表現している「流通過程から生ずる諸資本の形態上の相違」という観点については、本稿の主題とは直接関係するものではないが、かなり注目するべき性格を有していよう。これは、彼がこの引用箇所に続けて次のように述べていることからして、彼

の体系化過程における『資本論』第二巻中の「資本の流通過程」の成立と関連しているのであり、それがリカードの利潤論批判のなかから部分的であるにしろ「形態」把握のかたちで示されていることに、重要な意義がありうるように思われる。「固定資本は、労働過程に全体としてはいって行き、価値増殖過程には逐次的に部分的にしかはいって行かない。これは固定資本と流動資本との流通形態上のもう一つの主要な相違である。さらに、固定資本はただ交換価値としてのみ流通過程にはいって行く……が、一方その使用価値は労働過程において消滅し、けっして労働過程を離れることはない。これは流通形態上のもう一つの重要な相違である。」(a. a. O., S. 845. 同前訳、二七九ページ。a. a. O., S. 193—94, 同前訳、二五三ページ。なお、こうしたマルクスの論点については、また別の機会に考察を行なうつもりである。

(9)　a. a. O., S. 847, 同前訳、二八二ページ。a. a. O., S. 196, 同前訳、二五七ページ。

(10)　以上、a. a. O., S. 848, 同前訳、二八三ページ。a. a. O., S. 197, 同前訳、二五八ページ。

(11)　On the Principles of Political Economy, in The Works and Correspondence of David Ricardo, ed. by Piero Sraffa, Vol. I, p. 41—42. 堀経夫訳『経済学および課税の原理』(雄松堂、『ディヴィド・リカードウ全集』、第一巻)、四七ページ。なお、この点もこと改めて言及する必要はないのであるが、例えば、第三節での彼のいわば基本的な価値＝価格(絶対価値＝相対価値)関係——どの資本の生産物をとろうと結局は同一の性質として——に対して、より具体的にはそれぞれ個々的でしかありえない各資本によるその関係を考慮せざるをえないことになると、そのための社会的基準が第一章第六節での「不変の価値尺度」というきわめて外挿的な設定となったのである。したがって、修正論と「不変の価値尺度」を一対のものとする彼の理論は、スミスとは異なるにしろ、私的・個的商品経済の運動に対し、いかにして社会的基準を確定しうるかという彼の古典派としての苦心の産物であるとも言えよう。

(12)　MEGA, Bd. 3-3, S. 835,『草稿』Ⅲ、二六一ページ。Werke, Bd. 26-2, S. 181,『全集』第二分冊、二三六ページ。

(13)　なお、以上のようなマルクスのリカード批判に関係する論点については、すでに桜井毅教授『生産価格の理論』(東京大学出版会、一九六八年)の体系的ですぐれた考察がある。そこでは、例えばやや観点は異なるが次のよう指摘が行なわれている。「……このマルクスの方法によって、リカードにおける見逃しえない一つの問題点も同時に払拭される結果になった。その問題というのは、貨幣表現としては、価値尺度たる金の生産に従事する資本構成の差異が問題になりうるという点である。それはつきつめていうと価値規定を媒介する価格機構の役割の問題である。」(前出書、五四ページ)

三　リカード「自然価格論」批判

これまでにみたように、マルクスがリカードの修正論に対して彼自身の見地を示すさいには、ほぼ剰余価値とその分配形態たる利潤との関係としてのものであった。これは、それ自身では彼のいわゆる「費用価格」について、あるいは価値の費用価格への転化について論理的展開を十分与えうることになっているものとも言いえないのである。そうとはいえ、こうした彼の議論をいちおう彼の筋道に即して理解しようとすると、反面ではそうした彼のいわば結論的批判も了解しえないことではない。というのは、そもそも彼が批判的検討の対象としてリカードの理論は、マルクスもそう見ていたように、「価値について」の考察領域に属する性格のものであった。しかも、周知のごとくそこでリカードが説いた理論は基本的には価値・価格の同一視であり、したがって剰余価値と利潤との同一視でもあった。前者の問題は別にして、後者については、マルクスとしては積極的な理論展開にまで至るような論理を組み立てるということも行ないにくい関係にあったであろう。他方、彼自身の事情からしても、これも周知のごとき「資本一般」の枠組からすると、そこで可能な議論の性格としてはやはり剰余価値と区別される一般的利潤（率）について古典派的限界の根本を明らかにする程度のこととならざるをえなかったであろう。[1] また、前述の論点と関係させると、リカードが価値論の領域において、先きに引用したように競争による利潤の均等化＝価格の調整というような手法をとっていることに対し、マルクスの方法的視角はそれ自身では積極的な意味を見出しうるようにはなっていなかった。彼にとっては価値論および剰余価値論の決め方は、むしろそうした個々的競争的運動をできるかぎり排除し、一般的・総体的均衡によって解明しようという性格のものであった。こうしたマルクスの方法的視角は、彼の初期における対象把握の特徴をなした私有財産＝競争の社会というものとかなり対照的性格とな

っているのであるが、それだけ「経済学批判」の体系化にさいして彼が確保した方法によって対象把握の根本も左右されたと言いうるであろう。

しかし、この「草稿」の執筆過程において、マルクスが一貫してそうした方法による考察を進めていたかと言えば、必ずしもそうは言いえないであろう。すでに検討したことからも明らかなように、彼はリカードに対して価値と価格（費用価格）との相違を指摘しながら、なおその範囲に留まる程度にしか積極的見地を与えていないのである。好意的にみても、両者は異なるもの、という結論を引き出しているにすぎない。ところが、彼がさらに古典派のいわゆる自然価格論についてより詳細な検討を進めるということになると、そうした程度に留まることは不可能になるのである。その意味は次のような彼の見解によって示唆されている。「……A・スミスは、商品の自然価格すなわち費用価格を商品の価値と同一視しているが、このことは、彼が価値についての自分の正しい見解をあらかじめ放棄して、競争の諸現象から浮かんでくるがままの見解を、それと取り替えてしまったあとに起こったことだ、ということである。競争においては、価値ではなく費用価格が市場価格の規制者として、いわば内在的価値として――商品の価値として――現われる。」(2) いまここでスミスの労働価値論の学説史的意義をこと改めて考察しようとするものではないのだが、マルクスはここでは、直接スミスのその問題を固有に論じたさいに指摘したような科学的スミスと俗流的スミスというような対比での彼の価値論と自然価格論との性格づけを行なったのとは異なる理解を示している。その相違は、「競争の諸現象」から生ずる費用価格がこの商品経済のいわば内的な「規制者」として現われることの意義づけを積極的に受けいれてきていることにあろう。マルクスのことばに従えば、その費用価格は今度は、資本の生産物たる商品に対して「価値」とみなしうるほどの規制力として理解される性格のものである。多少このことを強調して言えば、これは、「競争」を通ずる商品経済の私的・個的社会関係によってはじめ

て現われるこの社会の一般的基準形成の性格の具体化を、マルクスが彼の理論展開の一部分としていることを示す関係のものになる。[3]

右のようなマルクスの見地について、先きの引用文に続く彼のリカード批判ではどのようになっているであろうか、この点をみておきたい。「ところが競争においては、この費用価格そのものが、賃銀、利潤および地代の与えられた平均率によって再び与えられるように見えるのである。したがってスミスは、これらの平均率を、独立に、商品の価値にかかわりなく、むしろ自然価格の要素として、確定しようとするのである。このスミスの倒錯を反駁することがリカードの主要な仕事なのであるが、しかし、このリカードは、この倒錯の必然的な結果を、だが彼にとっては論理的に不可能な結果を――すなわち価値と費用価格との同一性を――受け入れているのである。[4]」マルクスの言うスミスの「倒錯」は、マルクスの見地からする「倒錯」なのであって、スミス自身のものではないであろう。つまり、マルクスの指摘通りに、スミスは費用価格を価値とみなしえたために今度はそれぞれの「平均率」によって成る「自然価格」を規定することになった。これは、ここで詳論することではないが、むしろスミスにとっては彼の独自な労働価値論からすれば自然なことであったろうし、それゆえ同時にそれ自身は直接その労働価値論とはかかわりなく成立しうるように説かれたものであろう。[5] ところが、リカードにとっては、このかかわりなく成立してしまうことだけが重大な関心事であった。その結果が確かに一面で「価値と費用価格との同一性」を必然化したのである。しかも、このリカードの場合、すでにマルクス自身が批判し、かつまた一般的にもよく指摘されるように、原理を原理たらしめる労働価値論の性格は、スミスと比較すると明確さに欠けるうらみがあるというのである。だが、リカードのいわば価値でもあり価格(自然価格)でもありうるような抽象の仕方は、古典派が一度は通過しなければならない、というよりは結局そこにまで至らなければならないものであったろう。そして、そうし

たリカードの在り方は、マルクスの指摘以上にスミスによって与えられた「自然率」の規定するところの自然価格（地代を除く）を前提とするものであった。この場合、彼は、これもよく知られているように、そうしたスミスの世界をただ盲目的に受けいれたわけではないのであって、そうした自然率の支配というようなことこそが個々的な商品経済的運動と相即的であり、しかも全体としてそれをもって彼の労働価値論が成立しうるように理解されていたのである。その意味で、リカードがスミスを受けいれた関係にありながら、その自然率のうちから地代を排除することになったのも当然である。

さて、このように、マルクスのスミスやリカードに対する結論的性格づけは、彼らへの内在的理解というようなことについて必ずしも十分と言えないまでも、彼らがそう理解したことへの理論的配慮としては彼の方法的視角を広げた――あるいは変化させた――ように思われる。そして、このような変化は、おそらく一部では彼のリカード批判と無縁ではなかったであろう。彼は、リカードの『原理』第一章価値論について、先きのごとく価値と費用価格に関する批判的考察を行ない、さらに第二章やあるいは第四章を通じて自然価格について検討を進めている。第一章での批判的考察では、リカードの議論が全体にわたって価値論として提起されていた関係でマルクスの見地もいわばそうした側面を強調しがちだった。だが、第四章はある意味でリカードにおける固有の自然価格論であるから、マルクスの議論も当然それをふんまえうることになるはずである。しかし、まず彼はこのような指摘を行なっている。「ところでリカードは、彼の地代論を確立するために、二つの命題を用いているが、この二つの命題が表わしている競争の作用は、同じでないだけではなく、相対立している。第一の命題は、同じ部面の生産物が一つの同じ市場価値で売られるということ、したがって、競争は、いろいろ違う利潤率を、一般的利潤率からの諸偏差を、押しつけるということである。第二の命題は、どの投下資本に対しても利潤率は同じでなければならないというこ

と、または競争は一つの一般的利潤率をつくりだすということである。[6]」このように、彼は、明らかに一方では市場価値を成立させ、他方では費用価格（生産価格）を成立させることになる個々の資本の「競争」の性格を指摘している。あるいは、換言すれば、彼は、今度は個々の資本の価値増殖的運動のもとで、したがって直接には自己のもとで生みだす価値（剰余価値）にかかわりなく形成する価格関係のもとで、資本がおのれの社会的基準を生み出すことに着目することになっているのである。

リカードがスミスとの関係で『原理』第二章において地代論を展開したということの意味またはその第二章そのものの『原理』における性格等については、今ここで特に論ずるものではないが、おそらくマルクスにとっては、この第二章に置かれた地代論がきわめて重要な意味をもつことになったであろう。この点について、例えば彼は本来の検討対象になるはずの第四章に関説し、次のように述べているのである。すなわち、「……専門的に市場価格または市場価値を論じている第四章『自然価格と市場価格について』の部分では、かえって市場価格または市場価値をまったく論じていないということは、きわめて不思議である。むしろ彼がこの章で論じているのは、単に、別々の生産部面の価格が費用価格または平均価格に還元されるということ、したがって別々の生産部面の市場価値の相互関係についてだけであって、各特殊な部面における市場価値の形成についてではない[7]」と。確かに、第四章についてみればこのように言うことができるであろう。そしてこれは、リカードにとって、マルクスのいわゆる同一産業部門内や異産業部門間というような区別は不必要だったということを示すものである。この点に関して、最早これまで以上の説明は不必要であろう。価値と生産価格との間に横たわる問題について、結局価値論によってその解消をはかったリカードにとっては自然価格と市場価格との関係が価値に対する価格変動の問題として論ずることにならざるをえなかったのである。

したがって、マルクスにとってはリカードの第四章の問題は、先きにみたごとく、第二章における理論を対象にしながら、それが第四章の本来的課題であるというように扱うことになった。こうした事情そのものについてはともかく、マルクスがリカードのこの理論のなかに見出していることは、きわめて重要なことであろう。先きにも指摘したように、ここでのリカード批判では、彼が問題の根本を明確になしえていたかどうかはまずおくとしても、対象の原理的解明において必ずしも彼の批判的・方法的視角と一致しうるものではない理論的処理を要する事柄に踏み込むことになっているのである。彼は、先きに引用した文章の最初の部分すなわち、「競争の作用は、同じでないだけではなく、相対立している」とした理解をさらに敷衍して次のように述べている。「第一の作用によって、競争は市場価値を、すなわち同じ生産部面の諸商品について同じ価値を、つくり出す。といっても、この同じ価値は、違った利潤を生み出さざるをえないのであり、したがって、それは、利潤率が相違するにもかかわらず、というよりもはむしろ利潤率が相違するからこそ、同じ価値をつくり出すのである。第二の作用（これはさらに作用の仕方もまた違う。これは、別々の部面の諸資本家間の競争であって、この競争は資本を一方の部面から他方の部面に投じさせる。ところが、もう一つの競争は、それが買い手に関係のないかぎりでは、同じ部面の諸資本間に生ずるものである）によって、競争は、費用価格を、すなわち別々の生産部面に同じ利潤率をつくり出す。といっても、この同一利潤率は、価値が不等であることと矛盾するものであり、したがって、それを押しつけることは、価値とは違う価格によってのみできるのである。」[8]

やや引用が長くなったが、少なくともここでマルクスは資本家的商品経済の有する独自な性格について、従来のものとは異なる視角を要請されていることに感知しているはずである。それは、端的に言えば、価格の運動を通ずるこの社会独自の基準の形成であって、これはまた、その背後にあるところの価値を直接には「不等」とするよう

な「矛盾」を含むことになっているということである。しかも、この「矛盾」は、つまり価格によって「押しつけ」られる「価値」の在り方は――ひとまず彼の全般的な議論を別にして――、資本と労働との関係によって形成される価値との関係で生じうることになっているものであり、しかも、この価値はそうした関係自体ではまさにその「矛盾」を止揚したものとして規定されるはずのものであった。それゆえ、このようなリカード批判のうちに、彼自身本質的な批判の性格として提起したものは、彼のいわゆる「費用価格」の把握において、商品経済に特有な個々的な私的運動によって媒介されて生ずる社会的基準に対し、理論的に処理されなければならないその基準次元の異質性の解明であった。そしてこの問題は、単に全資本に対する総剰余価値の平等配分というようないわば価値実体からする費用価格の規定とは直接整合しうるようなことにはならないのであり、しかもそこに留ってはいないところに彼のすぐれた批判的視点もあったのである。(9)

右のような視点は、おそらく、マルクスがリカードによる修正論の克服に直面することによってその解決の方向として成立しうることになったものであろう。ところが、これは同時に、そもそも彼が古典派批判と自からの体系化を進めるための方法的視角とはすでに異なる性格におけるものであった。したがって反面ではそうした方法的制約のため、彼のこのような視点が、同時に彼のいわゆる費用価格論の発展とまたそのために不可欠とされるスミス―リカード価値論の再検討として直接深化されうるようにはなっていない。とはいえ、そうしたことが彼自身の方法的視角との関係で彼にとってまったく考慮されえなかったかというと、そうではない。やはり、ここでも彼は自己に生じた異質な視点に対し整合性を求めていたと思われる。それが、彼における論理と歴史との関係とか、いわゆる形態規定とかとされるものであって、しかもそれらは彼に固有な方法的視角からすると、また同時に問題を一種先送りする過度的調整のごとき役割を担うものでもあった。あるいは、逆に言えば、こうした先送りにならざる

をえなかったゆえんに、すでに、彼がスミス批判に明示させたごとき労働価値論が依然色濃く影響しているということになろう。

(1) 「草稿」の時期におけるマルクスの生産価格論形成の性格については、桜井毅、前出書、第二章「三」以下を参照されたい。また、この点に関係するマルクスの「経済学批判」体系のプラン変化とその変化の要因の解明については、時永淑、前出書、第三篇、第二章、第二節以下を参照されたい。

(2) MEGA, Bd. 3-3, S. 879,『草稿』Ⅲ、三三六ページ。Werke, Bd. 26-2, S. 233—34,『全集』第二分冊、三〇九ページ。

(3) 周知のごとく、マルクスがのちの価値形態論として具体化する論理を、何を契機にいつの時点で明確化したのかということについては、いまだそう明らかにされてはいない。「草稿」におけるベーリ批判にその意義を見出す見地が比較的有力であるのかもしれないが、それも必ずしも十分な主張とはなっていない。そうした見地も無視しえないであろうけれども、むしろマルクス自身にそうした解決を要求していたのが、リカードの存在であったという基本線も重要だと思われる。

(4) MEGA, Bd. 3-3, S. 879—80,『草稿』Ⅲ、三三六—三七ページ。Werke, Bd. 26-2, S. 234,『全集』第二分冊、三〇九ページ。

(5) この点については、リカードの剰余価値把握との関係でスミスにもふれた前出拙稿「マルクスのリカード批判（序説）」を参照されたい。

(6) a. a. O., S. 854, 同前訳、二九二—九三ページ。a. a. O., S. 204, 同前訳、二六七ページ。

(7) a. a. O., S. 855, 同前訳、二九三ページ。a. a. O.,S. 205, 同前訳、二六八ページ。なお、リカードの『原理』第二章の地代論にかかわるマルクスの議論そのものについては、また別の考察を必要とするのである。だが、よく指摘されるようなこの地代論を媒介とするマルクスの価値と生産価格との相違の「例証」としての役割それ自身についてはともかくとして、マルクスがリカードのこの理論と価値論との関係について十分把握しているとは言い難い。その一部はこの引用文中においても、リカード自身における第二章と第四章との関係に無自覚な批判が行なわれているのであり、またそのゆえんについては後述（小括）する通りである。

(8) a. a. O., S. 854, 同前訳、二九三ページ。a. a. O., S. 204, 同前訳、二六七六—八ページ。

（9）「草稿」における生産価格論成立の意義について、大内秀明『価値論の形成』（東京大学出版会、一九六四年）、三五六ページ以下の指摘をも参照されたい。

四　小　括

マルクスがリカード批判に向かっているとき、すでに指摘してきたように、大きくは彼の体系化作業のための独自な方法視角がその批判に対し一種枠組的作用を与えていたことになる。これはもちろんのこととしても、そのような作用をもっともはっきりさせたものは、おそらく彼のスミス投下労働価値論の評価であろう。すなわち、リカードの価値・剰余価値論につまり『原理』第一章の在り方に対して、スミスの労働価値論つまり『諸国民の富』第一篇第五章の世界就中いわゆる「労働・本源的購買貨幣」論を重視し、むしろ批判的に解したのであった。もちろん、こと労働価値論ということでは、リカードのそれはスミスを継承しようとしたものであって、マルクスのような見方もただちに不当だというわけではなかろう。また、スミスの独特な労働価値論は学説史においてそれ自身きわめて重要かつ興味ある対象であり、したがってその意味でもマルクスの重視はそのものとしては正当なことだったと言いえよう。だが、すでに別のところで再三取り上げたように、そうした重要性について彼が十分踏み込んだ取り扱い方をしえなかったのであって、むしろ、結果からすれば、その労働価値論の本質的な性格を根本的にあるいはその学説史的意義を十分に解明しえたことになっていなかった。そのうえで、彼はそのスミス評価やリカード評価およびそれらの批判を与えたのであるから、その面においても方法的視角の深化についてかなり制約されることになったであろう。

右のような点は、すでに検討してきたことから明らかなように、リカードの修正論や、したがって彼の自然価格

論、市場価値論批判を進める場合にも生じたのであって、彼の方法的枠組を越えうるような、その意味での彼の原理的対象認識の進展をいっそう可能としうるような視点を示しうることになっても、それをいわば独自化しうるほどに確保することはできなかった。スミス―リカードの関連からしても、そしてまたリカード『原理』の価値論の理論的性格からしても、リカードの検討は、彼のスミスへの視点はともかくとして――といっても、事実の問題としてはそうは言いえないのであるが――、彼にとって自己の方法的視角そのものを再検討するための好機となったはずなのである。端的に言えば、彼の方法的視角によって十分と思われた価値論・剰余価値論――それゆえその両者に関するスミス、リカード批判――形成が、じつはその延長線上にある生産価格論に対し、首尾一貫しうるものとなっていないということである。「資本一般」の範囲内とか競争論的視角の導入であるとか指摘されることがそのことを表わしているのである。

また、先きに取り上げたリカードの自然価格（生産価格）、市場価値論批判においても、その両者に対する決着のつけ方も、不徹底さを免れえないことになっている。「同じ生産部面のなかの競争の結果として生ずるものは、この部面の商品の価値を、その部面で平均的に必要とされる労働時間によって規定すること、つまり市場価値の成立である。別々の生産部面間の競争の結果として生ずるものは、いろいろに違う市場価値を市場価格に、すなわち――現実の市場価値とは違う――費用価格を表わすような市場価格に、均等化することによって、別々の部面間に同じ一般的利潤率を成立させることである。したがって、この第二の場合の競争は、けっして商品の価格をその価値に同一化しようとするものではなく、逆に商品の価値をそれとは違う費用価格に帰着させ、商品の価値と費用価格との違いを廃棄しようとするものである。」(1) このマルクスの理解は、それ自身として理解しにくい内容のものでもあるが、生産価格、市場価値に関してその理論的処理を形式的にはまったく逆にしているのであって、仮りに

「第一の競争」「第二の競争」という順序づけにそれほどの意味はないものとしても、内容上からも市場価値＝平均的労働時間をいわば実体的根拠としてその価格形態が市場価格、費用価格であるがごとき考え方を示すことになっている。あるいは、そう解することは、マルクスの本意と異なることになるのかもしれないが、つまり「商品の価値とは違う費用価格」との指摘が彼の意図となるべきことであるとするべきなのであろうが、右のような解明においてその点を明確に把握することは困難となっているのである。あるいは、ここで市場価値そのもののあるべき理論的規定を問わないまでも、古典派が固持することになった価値＝価格関係または資本家的商品経済の価格運動の基準をあくまでも労働に求めることになった対象把握の方法に関連させるならば、彼にとってはまずもって個々的な資本の相互関係を媒介する価格(生産価格)基準の成立と、同時にそれによってすなわちそうした市場関係によって社会的に設定されてくる価値の性格つまり市場価値の発現の性格が闡明されるべきであったはずである。古典派とりわけリカードが、実質的には生産価格であるものをもってなおかつ価値とし、しかもそれを労働によって規定されてくるものとしているのは、マルクス自身においても指摘することになっていたように、古典派的抽象であるとしても、商品経済自身があたかもそうであるがごとく表わす必然的性格を有するからにほかならないであろう。

総じて、マルクスは、古典派において提出されしかもそれが対象把握にとってきわめて重要な役割を担うことになった重要な側面を――すなわち商品経済の有する個的運動に即することによって見出すことのできる社会的性格を把握しようとする側面を――軽視しがちであった。(2) これは、その経緯についてはともかく、初期の彼の対象把握の独自性と比べるとむしろ対照的であるとさえ思われる。おそらく、そうした初期の特性は、経済学批判の体系化過程において資本・賃労働関係の階級対立関係としての重視への転換のうちに消極化されたのであろう。もちろん、この転換の有する積極的意義を無視するものではないが、そうしたことに基礎を置きながらも、なおかつ古典派と

の関係でみれば、彼らが絶えず視点を向けた個・私的社会の関係は商品経済の把握としてはやはり意義あるものであって、これを通した批判的再検討こそがまさに根底的な批判体系たりうるものということができるはずであろう。

（1）MEGA, Bd. 3-3, S. 855,『草稿』Ⅲ、二九四ページ。Werke, Bd. 26-2, S. 225,『全集』第二分冊、二六九ページ。

（2）もちろん、こうした側面はまがりなりにものちに、例えば典型的には『資本論』第三巻の「資本主義的生産の総過程」論のうちに、資本主義的商品経済に見合う意識形態の理論的叙述として確認されることにもなりうるのであった。